留学という国際移動 -
現代中国における日本留学実態の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38893

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ABSTRACT

This research investigates the cases why and how Chinese students are studying in Japan. For the present moment, about 110,000 Chinese students are studying in Japan. 90% of them do it at their own expenses and at least 60% of them come to Japan through the unofficial mediate routes.

I would like to analyze this kind of situation based on my own fieldwork research. To find the routes for the studying motivation in Japan, I made my fieldwork research in Shanxi Province of China and in Ishikawa Prefecture of Japan. The reason why I choose those two areas is that both of these areas provide mid-stream in economical growth of GDP and in population for their own courtiers. To some extent they can also be as representatives of their own country. Moreover, these two areas, has no connections between each other in political manner. They have connectedness mainly through the civilians, and this suites well to be subject for my research. Shanxi Province is also famous for its long history and traditions, and played as a model for socialism planning of economical system. Traditions and socialism planning system contradicts with globalization and urbanization. However, the later one (globalization and urbanization), becomes the main reason for study abroad motivations.

This dissertation consists from 5 chapters. The 1st chapter and the 5th chapter are about the research contents and conclusion. The 2nd and the 4th chapters are about the ethnography of the fieldworks; China and Japan, respectively. The 3rd chapter describes the social-network between the two counties.

I summarized my research in two main points. First, is that the Chinese students study abroad actually is a form of migration influenced by several reasons.

The second is that the unofficial routes played an important role motivating the students for the migration movements.

学位論文要旨

日本は中国人学生の主要な留学目的国の一つであり、グローバル化へ対応するために留学生の拡大受け入れ政策を講じている。日本に学ぶ中国人留学生は 11 万人ほどおり、その内９割以上が私費留学生である。その少なくとも 6 割以上は私費留学仲介のルートを通じて来日している。

研究背景

1980 年代以降、改革開放政策の実施や市場経済の導入により、経済の実質的成長を迎えてきたことが挙げられる。特に 2001 年、中国が世界貿易機構に加入したことにより、世界工場と呼ばれるようになった中国では、「国際化」と「市場化」は明らかに目標として目指すべき二つの潮流になっていった。社会の動きの中で「出国留学」も流行するようになった。当時大学生活を送っていた筆者は、「中国人がなぜ「出国留学」しなければならないのか、「出国留学」とは中国人にとってどんな意味を持ち、且つ、それはどんな要素によって左右されているのか」について興味を持ち始めた。2007 年、筆者は山西大学大学院世界歴史専攻を修了後、就職するまでの一時期、某留学仲介業社に勤務した経験がある。さらに、金沢大学の博士課程に所属してからも、留学や留学に関する社会メカニズムについての調査を日中両国で行った。留学仲介業者での勤務とフィールド調査で得られたデータを元に、歴史人類学の視点から、現在の中国人の留学実態を検討したいと考えた。

研究内容

本論文では、留学する「個人」に焦点を当てながら、「グローバル化」や「国際化」を背景とした個人の国際志向の動きと、「保守的社会」を背景とした慣習や伝統に捉われがちな人々の傾向などの間に、矛盾が生じている現状を明らかにする。さらに、そのような矛盾すらもはらんだ中国社会のダイナミズムを視野に入れ、現代中国における「留学生」の変容、ならびに「留学」を通した「移動」について、グローバル社会が人にもたらす影響の一側面について検討することを目的とする。

具体的には、日本の中国人留学生の出身階層と中国における社会流動を結びつけて検討し、従来の国際移動の「エリート」「貧民・出稼ぎ労働者」の移動傾向と異なる現代型の留学の実態を、日中両国におけるフィールド調査から明らかにする。次に、留学生の出身地と階層以外の問題を取り上げながら、現在、中国で留学ブームが発生している原因として、なぜ中国で教育を受けずに他国に出るのか、留学の魅力はどこにあるのか、などの留

学の需要が生み出された背景について考える。また、留学の中でも日本を選択する傾向が如何に生成され、現在の主流である私費留学生が、個人でどのように留学の基準を満たし渡航を可能にしているのか、中間の私費留学仲介業などの中間ネットワークはどのような役割を果たしているのか、さらには帰国留学生がどのように出身社会に戻っていったのか、などについての調査成果を紹介する。

最後に、歴史的観点とグローバルな視点で留学を再考する。グローバル時代における日本の国際化と中国の国際化の共通点と相違点、受入地である日本の国際化に関する三つの側面(西洋化、日本化、相互調整)と中国の国際化(資金導入、経済発展、海外発信)において、留学生がどのような役目を果たすのか、ということを問題として設定する。さらに、以上の論点を踏まえてフィールド調査の結果から、留学の発生する背景を歴史的、グローバル的視野から考え、将来の「留学」の向かう方向や、送り出す地と受け入れる地が共に向かい合うべき課題を導き出す。

調査概要

筆者は中国の山西省と日本の石川県を自分の調査地とし、調査期間は 2002 年から 2013 年にかけて、参与観察、聞き取り、文献・資料調査を中心とした調査を実施した。上述の二つの地方を選んだ理由としては、まず「国際化」という頻繁な交流移動の現代性と、慣習的に外に出ようとしない地方都市の傾向との間に相反する傾向から、留学を捉え直せると考えたからである。また筆者は、留学を通じて、「市場」と「計画」が転換する中国の経済的ダイナミズムの中で、個人と社会が如何に影響し合うかについて検討したいと考えた。山西省は歴史的に古く、地理的に便利な中国文化発祥地とされる。山西区域は計画経済の模範地として、社会主義革命の中堅地帯と言われる存在であり、この二点に関しては最適な調査地といえる。さらに本論では、留学を実践する「個人」に注目する。受け入れ地の石川県と山西省政府機構との交流は殆ど存在しておらず、留学コネクションはすべて民間人の手によって作られてきた。それだけではなく、この二つの調査地はともに中央から離れた地方であり、GDP と人口は両国における中レベル程度に留まっていて、国際化のビジョンを持っていながら国際化がさほど進んでいない。この二つの地域の留学における送り出しと受け入れの検討を通じて、中国と日本の社会比較や社会変化など一連の問題を浮き彫りにする。

調査対象は大きく三つの部分に分けられる。1 つ目は、送り出し地の教育と社会、2 つ目は、送り出し地と受け入れ地を結びつける中間ネットワークの存在、3 つ目は、受け入

れ地の現状となっている。送り出し地の社会ダイナミクスを検討する上で、日中双方に存在しているトランスナショナル・ソーシャルネットワークに注目し、民間の繋がりあいと現在のトランスナショナル・ビジネスネットワークの調査を行った。そのような私費留学生の派遣ルートの調査を通じて、国際移動をめぐるネットワークが留学生の移動に影響を及ぼしていることが明らかになった。

論文構成

第 1 章では研究目的、及び本論が主眼に置く「人の移動」を歴史枠に入れて紹介し、特に近代以来の人の移動と中国人の国際移動を研究背景として紹介する。さらに、留学に関係する先行研究を紹介し、先行研究を踏まえた上で研究のポイントを提示し、データ収集に要したフィールド調査の内容を紹介する。

第 2 章では、送り出し側である中国社会において、留学生が輩出される背景となっている経済システムやメカニズムの、一連の社会的状況について述べる。第 1 節では、改革開放以降生まれた若者たちが「国際化」「市場化」に影響を受けながら、前世代とは異なる人生設計や、教育、就職における競争に迫られていること、及び国際化のムードに流される傾向にあることについて言及した。第 2 節では、中国の一地方である山西省において創出されてきた、日本イメージの変遷について記述する。中国における日本イメージは、国際情勢や日中両国の政治政策に影響を受けやすく、日中両国の親疎関係によってもその捉えられ方が左右されてきた。日中間で行われた往来や活動によって日本のイメージが向上することもあれば、中国国内における反日感情が煽られることもあり、留学における渡航対象国のイメージの把握は、留学生を調べる上でも重要な要素となっている。第 3 節では、留学生を送り出すために必要な語学習得の実態について、同じ山西省にある日本語学学校における調査内容をまとめた上で、さらに、それらを民間日本語教育機構と公の日本語教育機構の現状に分け、その相違について説明する。

第 3 章は、留学生を「移動者」として送る「送り出し地」と、彼らを受け入れる「受け入れ地」における、移動のための懸け橋である中間ソーシャル・ネットワークの存在を明らかにする。第 1 節と第 2 節では、中国の政策転換の背景と、日本と中国の間に存在している民間の繋がり合いが、仲介のための機能を持つという事実関係について記述した。第 3 節と第 4 節では、現在、最も利用されている留学ルートについてである、私費留学仲介会社の調査内容を紹介し、なぜ仲介会社がなくならず存在し続けるのかという理由について自身の見解を述べる。第 5 節では、留学生の受け入れを助長する、受け入れ先にある中

国人のエスニック・ソーシャル・ネットワークの存在について、そのメカニズムや特徴を浮き彫りにした。

第 4 章では、受け入れ地における留学生受け入れに関する社会背景と、日本の一地方である石川県における留学生の生活実態について分析を行った。第 1 節では、日本の国際化や留学生の受け入れ背景について紹介し、第 2 節では、石川県における中国人留学生の現状について記述した上で、数値上のデータとインタビュー内容を合わせて石川県の中国人留学生事情を説明した。さらに第 3 節では、留学生の進路を巡って生じる留学におけるジレンマを、留学生たちから聞き取りを元にした事例と合わせて分析した。これら、3 方向からの検討を行うことにより、現在の私費中国人留学生の全体像を明らかにする。

第 5 章の終章では、本論が提示した留学の実態をまとめ、中国における留学の検討を通じ、「留学」の意義をこれまでとは異なる視点で提示し、一連の社会メカニズムや要素によって左右されてきたことを明確にした。それをまとめると、従来の留学が「教育を受けるために移動する」ものであるという視点とは異なり、現在の中国人の間で主流になっている留学は「移動するために教育を受ける」という類の国際移動ではないかと考える。また、日本と中国の間にたくさんの民間の繋がりとトランス・ネショナルネットワークが存在することを取り上げ、他の留学目的国と違って、日中間にビジネスネットワーク以外に、文化および民間人の友誼によって作られた連絡網があることについてまとめた。この広範囲な民間の繋がりは日中間においては深く、長い日中交流史によるものであり、筆者は、この民間の繋がりが人を移動させる道具としてだけではなく、日中間に固い架け橋の機能も果たすと考える。

５　論文審査の結果の要旨

本論文は、とくに改革開放政策以後に急増する中国人学生の日本留学を対象として、そうした日本留学の急増の背景となった中国の教育事情や日本イメージの変化、留学生を送り出す中国側の留学支援機関の実態、留学生を受け入れる日本の事情とそこでの中国人留学生の実態や留学後の進路先といった一連の過程を、それぞれの場所での丹念な実地調査で収集した資料から明らかにしようとしたものである。

第１章では問題提起の後、中国の近代以降の留学の歴史を概観し、国際移民や移民斡旋業に関する先行研究と、日本への中国人留学生に関する先行研究をレビューしている。

第２章は「送り出し社会のダイナミクス」と題し、本研究の中国での調査対象地とした山西省の留学生送り出し地としての状況を記述している。中国一の石炭埋蔵量を有し重工業が盛んな山西省は、また歴史的にも華北の中心地のひとつであり、省外への移住・移民意欲の高い地域ではなかった。そうした中で若者に日本留学を思い抱かせるようになった地域事情を、省の教育行政や留学実績の歴史的概観、日本を留学先に考える下地となったと思われる日本イメージの変化の歴史的概観、日本留学を支える山西省での日本語教育の歴史的概観など、それぞれ現地で収集した厚みのある資料から描き出している。とりわけ日本イメージの変化の記述は、客観的裏付けの得にくい題材でありながら、文革期以後の日本イメージの変遷を新聞記事や日本関連の出版物、また日本製の電化製品等の耐久消費財の普及や日本製テレビドラマの放映といったデータをもとに提示され、信頼のおける論考となっている。

第３章は本論文のもっとも独創的な部分で、どのような手順とルートをたどって山西省の若者が日本に留学してきているかを、私費留学生の渡航を支援する留学派遣会社に焦点を当てて描き出している。そうした会社のひとつでの研修という名目の参与調査を行った筆者は、そうした会社がいかにして留学希望者を集めるのか、集めた学生にどのような留学先情報を伝えるのか、留学手続きのどんな支援を行うのか、日本の大学とはどのような連携をとっているのか、といった留学の具体的手順を詳細に記述し、留学生が日本に来るまでの実態を実証的に明らかにしている。さらにそうした派遣会社に加えて、留学希望者の日本への受け入れをサポートする中国人留学生のネットワークについても言及し考察している。私費留学生の派遣支援会社の実証的な研究は、従来の国際移民や留学生研究でも類例のないオリジナルな研究成果と高く評価できる。

第４章は日本の石川県を調査地として、日本政府の留学生受け入れ方針を概観し、日本全体

と石川県での留学生受け入れ実績を統計データで比較分析した後、石川県在住の中国人留学生40 名を対象に行った聞取りと、補足的なアンケート調査をもとに、来日の経緯や留学後の進路の展望などを提示し、日本留学が中国人学生にもたらす効用について論じている。明らかにされた留学生の実態は、他の在日中国人留学生研究で指摘されている像に比べてさほど目新しさはないが、大都市圏ではない地域への留学生として、文系の学部で学ぶ学生が多い、また私立大学への私費留学生が多い等一定の特色を示している。

第５章は終章で、中国における留学のもつ意義をまとめ、国の近代化に資するためというかつての名分から、留学生自身の学歴向上のためという個人的性格のものになっていると要約している

留学生を送り出す背景としての中国の社会事情の概観から、留学生を実際に海外に送り出す支援をする留学派遣会社の実態究明、受け入れ地での中学生の実態調査まで、国際移動のひとつのかたちの具体的記述に力が入れられているため、それぞれの部分の記述や考察は興味深く信頼の置けるものになっているが、そうした留学という名の国際移動を成り立たせているさらなる背景、たとえば高等教育の大衆化や学歴のグローバル化、それらを含めた中国の近代化の過程といった大きな枠組みの中にどう位置づけるかといった議論は、残念ながらじゅうぶんなされているとは言えない。しかしとりわけ改革開放期以後の中国から日本への留学生の急増を、送り出し地の事情から移動の具体的過程、さらに受け入れ地での実態までを、丹念な実地調査で明らかにした点、中でも可能な限りの実証的データにもとづいて描き出された中国での日本イメージの変化の記述や、類例のない留学派遣会社の参入調査による実態解明は、本論文の貢献として高く評価されるべき部分であり、博士学位論文にふさわしいものと審査員一同判断した。